

# 魅惑の改変クリーム

イラスト：NOVEL AI

著者：わん公



## 目次

第一章↳プリンセスの章↳	2
--------------	---

第二章↳メスガキの章↳	7
-------------	---

第三章↳スク水ロリの章↳	9
--------------	---

## 第一章　プリンセスの章

大人になると、子供の頃の自由な時間が恋しくなる。

あの頃は、人付き合いもある程度は好きに選ぶことができ、遊びたいときはいつでも遊べたわけでは無いが、それなりにあつただろう。

また、子供の内であれば、気楽に異性と会話ができたため、恋愛のハードルも低かったのではないだろうか。

内田　冬樹は、今にも崩れそうな足取りで、もうすぐ光りだすだろうイルミネーションを眺める。

大通りには、子供が、大はしゃぎでリボンで結ばれた箱を持っていたり、何十組というほどのカップルが歩いていたり、そこら中に設置された屋台付近で食べさせ合いをしている。

いつもはこの通りはそこまで賑わってはいない。では何故、こうなっているのかという今日はクリスマスであるからだ。

クリスマスといえば、パーティーやらご馳走やらがよくあること。しかし、冬樹にはそんな感動的なことなんてものは存在しなかった。

生まれてこのかた、孤児として生きてきた彼には友人が少ない。その友人は彼と同じく共にする人はいないはずだが、今日は用があるといい先に帰ってしまったのだ。

「はあゝ結局、俺一人寂しくクリスマスを明けるのか。いいさ、ブイチューバーを眺めていればクリスマスなんて楽しめるに決まっている」

そう言つて冬樹は、一度スマホを取り出す。歩きながらで危ないのだが、チラ見程度ならばとYouTubeを開こうとするが、どうも開かない。

数分ぐらいして画面が切り替わり、やつと見れると思つた瞬間――

『ただいま、回線の混雑により通信環境が不安定となっております……………』

と表示された。

「……………」

この瞬間、冬樹の頭からはこんなことが浮かび上がっていた。

（回線の混雑⇨他の人達が動画を沢山見ている⇨クリスマスであるのに暇だから動画を見ている⇨他の人達もボツチ⇨冬樹と同じ仲間が沢山いる）

そんな結論がでてきた。しかし、仲間がいるから心がポツと温まるなんてことはなかった。はつきり言って、こんな仲間は欲しくない。

冬樹はお気に入りのユーチューバーが視れないことにより、今にも凍えそうな気分になる。

「日本も落ちたものだな」

そうボソッと小さく呟く。しかし実際のところ、多くの家族や恋人達などが動画を観ていたからであるのだが、冬樹はそれに気づくことはない。

やがて、黄昏れながら歩いているとアパートにたどり着く。かなり年期が経っているものであるが、耐震性や見た目的に問題があったことから、最近リフォームされたアパートだ。

故に外見も内装も綺麗であり、家具さえ整えれば、豪華な家にも見えるだろう。ベランダからは海が見える。冬樹は玄関に鍵を差し込み中に入る。

「ただいま」

「お帰りなさい」



「一人暮らしのなかいつも通り挨拶をすると高い声が聞こえる。荷物を玄関周りに放り上げて洗面所で手を洗い、自室に足を動かす。

昨日から丸一日寝ずに働いたのだ。すぐに寝たい。そう思った思いで瞬きを繰り返す。

——ってちよつとまで！

冬樹は突然、銅像のように動きを止める。傍から見れば不審な動きに見えるものの、冬樹にとっては仕方がないものであった。

何故ならば、冬樹は一人暮らしであり、共に住む人はいないのだ。合鍵も渡した人な

んていない。

「誰かいるのか！」

先程、甲高い声が聞こえたことから中にいるのは女性であることは間違いない。

のそりのそりと警戒しながらゆつくりとドアを開ける。するとそこには長い金髪に海のような碧眼の女性が立っていた。

しかし、そこに佇んでいるには違和感がある格好であった。

着ているものが、どこにもいるようなズボンや普通のスカート、洋服ではない。

頭にはティアラと白く透明感のあるヴェールを被り、腕は白いロンググローブを嵌めている。

身体にまとわれた白いドレスは、下に向かうほどに広がっている。それはこの部屋の半分ほどが覆われるほどだ。この格好は結婚式を挙げるときのものである。その姿を眺めていると女性から返答が返ってくる。

「誰だとは失礼ですわね。私は貴方と婚姻を結んだわけではありませんか」  
「俺は結婚などしてないし、一人暮らしをしているんだ。ふざけないでくれ」

いったい何のつもりで人の家に入ったのだろうか。冬樹の家は結婚式場のような、花

嫁が楽しむような会場ではない。



盗むにしてもウエディングドレスでは、外に出るときに目立つだろう。

「もお、本当にどうしてしまったの？」

「それはこっちのセリフだ。不法侵入で訴え……ど、どうした」

冬樹が電話を持ち警察を呼ぼうとすると、先程まで心配そうにしていた花嫁の様子がおかしくなる。

「うづ、うううんんん」

急に頭を抱えだし壁により掛かると、ティアラが霧のようにちり、美しく透き通ったヴェールも消え去る。白く広がっていたウエディングドレスは、まるで生物のように蠢くと、マーメイドドレスのようになった。

パフスリーブやフリルが消えた頃には、上半分と下半分に切れ込みができ、黒い洋服とデニムになる。膨らんでいたお尻は、安産形から女性とは思えない小さなお尻となる。

大陰口はビラビラのところを無くしていきながら口が閉じていく。膣が無くなるとクリトリスは肥大化を行う。パンティーの中はだんだんと大きなクリトリスが出来上がると精液を発射するところに繋がる。そして陰茎となった。

その頃にはパンティーはブリーフに、胸は真っ平らになり、髪や目もものの日本人特有のものに変わる。つまり、黒髪黒目になった。

顔つきも女性だったものから、角張った男性のものになり、身長が伸びていく。

「づ、ははどうやら元に戻ったみたいだな」

「え……ええ」

そこにいたのは最早、先程の人物の面影は一切ない。冬樹はそんな状況に驚きつい声が出てしまう。もちろん女性が男性に変化したことにも驚いたが、それだけではない。



眼の前に立っている人物は冬樹の友人でありこのアパートの大家の息子であつたからだ。

この時、冬樹は何故、自分の部屋に他人が入ってこれたかを理解した。大家は何かあつたときのために合鍵を持っている。今回、この大家の息子である友人はそれを使って入ってきたのだらう。

「うそ……だろ。夏菜だよな」

恐る恐る聞いてみる。

「ああ、そうだ。びっくりしただろ」

「あつたりまえだ。いや、何だよ今の」

冬樹はこれは夢なのかと言うように目を擦り、顔をつねりながら尋ねる。

しかし、見えるものは変わらなく、痛みも感じる。どうやら夢ではないようだ。

「見ての通り変身だよ。昨日、家に入ろうとしたら、お隣のお婆さんに話しかけられて、魔法のクリームを貰ったんだ」

「魔法のクリーム？　それがまさか今の変身に関係があつたり？」

「そういうことだ。これはな、一時的だが服や身体、物体に塗りつけて変わってほしい

ものを思い浮かべると、思っていた通りのものになるんだ」

夏菜はテーブルに置かれていたカップを手取る。その中に入ったクリームをすくい上げ部屋中に塗りたくると、グググッと周りから音が響く。

壁を見ると少しづつ遠くなっている気がした。部屋や家具、その他も色や形が変わりだすと、なんとそこには高級感ある空間になった。床には赤い絨毯、無駄なものはいくつも消え、その代わり高そうな花瓶や新しい部屋までもが作られていた。

リフォームや家具代的に一体どれくらい掛かるだろうか。1000万は余裕で掛かるだろう。

便利すぎて冬樹もそのクリームが欲しくなってしまう。これをうまく商売に利用をす

るとしたら、少なくとも人生お金に困ることはないだろう。

「す……凄いな。夢でも見てるみたいだ。なあ、夏菜いいこと思いついたんだが、それを使って商売しないか」

冬樹は夏菜に交渉を持ち込んで見る。魔法のクリームが欲しいのは確かであるが、友人から値段が付けられなさそうな物を貰おうとは考えなかった。結果、共に使うべきだろうという思考に至った。

「悪い。それオレも考えたんだが、量的に出来そうもない」

「そうか……」

冬樹の言う通りだ。カップの大きさを見た限りでは少ししか使えないだろう。

また、効果は一時的にと先程言っていた。商売には使いづらいものであった。

せめて、効果時間が永遠であれば、話が違ったであろうが。例えば高級なものを売ったりなど。

「まあ、そんなに落ち込むな。無くなったとしても、またお婆さんに分けてもらえるか聞いて見るからさ」

こればかりは仕方がないと冬樹を励ます。

「そうだな。せっかく面白いものが見れたんだ。ここで暗いこと考えるよりも楽しむことだよな。本当はこれを使ってブラック企業から抜けられると思ったんだが仕方ない」

「いや、オレが聞き間違えてなかったら、前半と後半で言っていることがチグハグだぞ」

そんな感じでウダウダと話しているうちに冬樹は、なぜ夏菜がここにいたのかを聞いた。

「あつ！ そうだった。つい忘れてた。実はな試したいことがあったんだ」  
「試したいこと？」

人の家に入るほどに試したいことがあったのに、それを忘れるだなんて大丈夫だろうか。

「言いづらいことなんだが、あのクリームで女の子の彼女役になってほしいんだ」  
「はああ！」

本当に、はあああ！ である。いきなり訳がわからないことを言い出した夏菜に、冬

樹は寒気を覚え一歩引いてしまう。

「た……頼む。男だけのクリスマスにたくないんだ」

「いや、俺はそんな趣味はないし、こっちは相手が男だぞ、無理に決まってる。それに精神的にも……」

「大丈夫だ。あのクリームは心まで変えることができる。というよりあれはそもそも存在改変をするクリームみたいだから」

グイグイと食い下らない夏菜は、しつこく冬樹にお願いをする。このままでは埒が明かないと思った冬樹は、仕方なく受け入れることにした。



「わかった。わかったから。そんなに服を引つ張らないでくれ」

「ありがとう！」

「ただし、一回だけだ！ それ以上は——」

「わかってる」

本当にわかつているのだろうか。冬樹は、友人がもう一度とせがんでこないか不安になりながらもカップを手取る。

「で、どんな女の子が好みなんだ？」

クリームに触れる寸前に手を掴まれる。

「それは内緒だ。オレがお前に塗るから、考えなくていい」  
「そ、そうか……」

夏菜は目をギラギラにニヤつきながら、クリームをすくい上げる。  
その表情はイタズラを楽しみにする子供のようなものであったが、大人がしてはいけない顔であった。

お巡りさん呼びたい。

冬樹は服の上から、軽くクリームを塗りつけられる。

仕事着をクリームで汚されているところを見て、後で洗わないといけなさそうだ。そう思っていると頭皮が制汗剤をかけられたようにスースーしてきた。その染みるような感覚に手を頭に持っていく。

「始まったみたいだな。面白いから動画も撮っとこう」

「ちよつ、止めろ！ 恥ずかしいだろ」

冬樹はとっさに夏菜のスマホを取り上げようとするが、自身の身体が変化し始めてから動きが鈍くなり、触れることすら出来なかった。

「く……後で覚えてろよ」

「フッ」

嫌味を呟いていると、夏菜は勝ち誇ったような笑みを浮かべる。その反応にイラッと  
し、睨みつけていると、髪が手に擦れているのに気づいた。

「く、くすぐったいな」

髪が伸びていくことにより、首筋に触れ落ち着かない。髪質は男のようなボサボサしたものから肌触りの良いスベスベしたものになり、金髪に染まる。

つけられたクリームも透明度を増していき、見えなくなっていく。

「ほら鏡を見てみるよ」

夏菜は面白そうに動画を撮りながら、冬樹に手鏡を渡す。

「か、かわいいな。って声が高い！」

そこにいたのは腰まで長くした金髪に碧眼の男の娘であつた。

顔を赤らめた表情は、保護欲が刺激され、男としてはどうにかしてでもお近づきになりたいと思える程だ。

そんなとき、足元がおぼつかなくなる。

「あれ……なんだか。部屋が広くなって……」

「いや、お前が縮んでるだけだ」

どうやら、身長に変化があつたようだ。冬樹は縮まり切ると約140cmと、成人女性の

平均よりも小さくなってしまった。

そして、肺の辺りに全身の肉が少しづつ流動している感覚がやってくると、胸が張る。

「ふ、膨らむ！」

胸はだんだんと乳腺を形成し、膨らんでいくと乳輪が艶やかなピンク色へ染色され、前に突き出る。同時に、服の下の下着が形状を変えていく。布面積が小さくなっていき、色も薄いピンクが浮かび上がる。やがて、胸が巨乳にまで出来上がると紐の部分が形成され、後ろのホックからカチツと音がした。

「おっぱいが出来た……」

また、ブラだけでなくコルセットも作られ、胸とともに作られていた括れが細く締められていく。手も硬さが失われていき、女性特有の細く伸ばされ、脂肪がつけられる。

「ぐうう……く、苦しい……」

「なあ触らせてくれ」

「駄目だ」



そんなことをいい冬樹は夏菜を威嚇する。しかし、自分は胸の柔らかさを堪能していた。生まれてこの方、母親以外の女性の胸を触ったことがなく、その胸の感触すら記憶にない。

冬樹にとってこの柔らかさは、至福でもあり、自分がこれから本当に女性にさせられるんだと自覚させられる。

変化からくる恥ずかしさ、女性になりたくないという恐怖心、そして女性を体験してみたいという好奇心で複雑な気分であった。

それらを心に抱えているとお尻が大きくなり、制服が上からピンク色のツルツルしたサテン素材に侵食されていく。

長袖が消え、代わりに短くなった袖が膨らみパフスリーブとフリルが生まれる。変化はズボンにも及び、制服同様に色を染められていく。頭には宝石が装飾されたティアラが乗せられ、徐々に夏菜が思い描いた姿を取り始めていた。

「キャッ」

冬樹はズボンが変わったことで、男のところが締め付けられ、つい可愛らしい声が出てしまう。

「き……キツイ」

それもすぐに収まることになる。ズボンはふわりと柔らかみを持ちスカートになると締め付けが弱くなる。スカートの中はパニエにより、広がっている状態だ。

足はハイヒールを履かせられ、さらに脚が細く見えるようになる。

腕の皮膚からは、白く長いロンググローブが現れ、より華奢なものになった。傍から見れば、これで終わったかのように見えるが、冬樹は最後の変化が迫っているのに気がつく。

「?! あ……っ、ついにアソコが」

「お！ ちょっと中を見せてくれよ」

「ちよっ！ スカートめくるな！」

「見えた！」

冬樹の静止も聞かずにスカートの中を除く夏菜は、しっかりと中の様子を撮影する。  
そこにあるのは既に男の下着ではなく、パンティーであつた。そして、冬樹の男としての証明は動きを見せた。

「す、すげえー！」

「んう……やつ、さ……触るな！」

まず、アソコが今の姿に合わない程に膨らむ。気になって抑えてみるとペットボトル

ぐらいの大きさだとわかった。

「どうしてこんなに大きくなって！　で……出る！　これ……出したら……う……  
うああああ！！！」

それは今にでもこんな窮屈なところから開放されたいと主張しているように見える。  
急激に込み上げる射精感に冬樹は逆らうことが出来ずに、男としての成分を放出してい  
く。しかし、その成分は精液としてではなく、ガスとして出されていき、濡れている感  
覚は無い。

男性成分が無くなっていくとともに、太さを失っていく。夏菜は、そんな変化を前に  
冬樹のアソコをパンティー越しに舐め回すように触れる。

「く……くすぐつたいから」

「いいだろ。減るもんじゃないし」

ねっとりとした触り方に不思議と恐怖を覚えてしまう。それは先程の自分であれば、不快感はあれどもそこまででは無かったであろう。

冬樹は、身体だけでなく心まで改変されていくのを実感する。そんなとき、お腹の中が優しく包まれるような暖かさに筋肉が緩む。

体内では骨格が男性のものから、出産に向けたものへと開いていく。

「あ、ああ無くなる！」

陰茎は押し込められながら、皮を無くしていき、尿の通り道が塞がる。精巣も遺伝子変異を起こしながら性質を変え、上へ上へと移動をし、卵巣になる。それと同時に作られていた精子も卵子に形を変えた。

空になった玉袋の毛は消滅し、シワを伸ばされてパイパンになる。このとき、陰茎はクリトリスへと改変した。内部では、精囊が分厚い肉に覆われ、大きく膨らんでいくと子宮になる。射精管も変質をしていく。

「あ、温かいものが下に……」

「ついに！」

そして、射精管は伸縮性をもつと男性のものを入れられる膣になり……。

「割れる！ 割れてしまいますわ♥」

平らになった股がブクリと大陰口を形成し、ビラビラとしたものが出来る。同時に、王子様の陰茎をマッサージする膣が外に繋がった。



「本当に女性になってしまったんですね。ってあら？  
わたくしの話し方がお姫様口調  
に……………でも、これがしつくりきますわ」

















